



■ 器量定めめのわんずがさ ■

わんずがさとは、6 月号で取り上げた「天然痘」の俗称です。江戸時代には「天然痘は器量定め、麻疹は命定め」（天然痘は膿疱のうぼうのあとが顔にも残るので子どもの容貌を左右し、はしかは子どもの寿命を左右する）という言葉があったほどで、どちらも危険な感染症とされてきました。江戸時代の末期に至るまでの長い間、その対策も治療法も無いままに、古人たちは天然痘や麻疹にかからないようにと神仏に祈祷しながら、その恐怖にさらされてきました。

■ 水戸藩と天然痘 ■

下図は、青山拙齋せつさい塾の門下生 91 人の肖像画集の一部です。水戸城下には多くの塾があり、塾で基礎学力をつけた藩士の子弟たちが弘道館に入学しました。肖像画のうち、数人の頬にみえる斑点は、当時流行していた天然痘のあとです。この肖像画集には、一人一人の門下生が表情豊かに描かれています。

水戸藩においても、古文書に天然痘の流行が記録されています。しかも、歴代の藩主とその家族が相次いで罹患していました。弘化 4 年（1847）の流行を見聞した藩医 本間玄調は、『種痘活人十全弁』の中で「一軒の家にて三人死するものあり、（中略）死を免る家は甚だ稀なり。幼少にして死したる者は勿論、多くは十五、六歳より二十五、六にて死たる者も亦夥し。」と記録しています



弘道館（水戸藩 藩校）



青門肖像せいもんしょうぞう

天保 10 年（1839）弘道館展示資料

■ 藩医 本間玄調 ■

本間玄調は、現在の小美玉市に生まれ、長崎でシーボルトに蘭方医学を学び、さらに華岡青洲に師事して外科学を習得しました。数々の医学書を著し、藩校「弘道館」では「医学館」の教授として教育にあたり、近代医学の普及に尽くしました。

水戸藩における医学は、九代藩主 徳川斉昭の積極的な医政への取り組みによって大きく進歩しました。特に歴代の藩政にも大きな影響を及ぼした天然痘については、本間玄調をはじめとした医師らを長崎に派遣し、研究と調査、さらにワクチン製造の種痘苗の確保を命じました。

『景山救痘録』（斉昭著）には、「種痘は牛痘が良いが、その種は入手困難であるので、父母に悪病の無い子の軽い痘を選び、それを種える人痘による種痘法でも良い」として、水戸藩において最初に種痘が行われたのは、天保6年（1835）で人痘の接種法であったとされています。天保13年（1842）には、藩主の二人の子どもや本間玄調の子どもにも接種して、その安全性を確かめたとされています。



本間玄調(1804~1872)

■ 医療政策の推進 ■

このような経緯のなか、斉昭は桜の牧を創設し（現在、その一部は水戸市民野球場：ノーブルホームスタジアム水戸、茨城県立水戸桜ノ牧高等学校等の施設として利用）、牛痘苗確保のための牛の基地牧場としました。桜の牧で育てた子牛を弘道館医学館に移し、ワクチンの生産を試みました。薩摩藩主 島津斉彬を介して分与された牛痘苗を使用し、牛痘接種は嘉永3年（1850）に本間玄調によって成功しました。その後、医学館で育成した医師に村々を巡回させ、郷校などで種痘を実施し、生活困窮者への接種にかかる費用は藩が負担し、予防接種人口は13,000人にも及んだと言われています。ジェンナーが牛痘接種法を開発してから水戸藩でその接種が始まったのは、約50年経過してからのことでした。

■ 夏目漱石と予防接種 ■

ところで、種痘で思い出されるのは夏目漱石です。漱石はお札の顔として、近代日本を代表する知識人の一人として選ばれました。この漱石のお顔の真ん中に、実は彼自身がいつも気にしていた天然痘のあとが残っています。漱石は天然痘そのものに罹患したわけではありません。3歳の頃に受けた予防接種がきっかけとなって膿疱が吹き出てしまい、後に顔にそのあとをのこすことになったのです。

『吾輩は猫である』の猫の主人 苦沙弥先生は、漱石自身のことですが、猫は主人の顔についてこう語っています。

主人は痘痕面^{あばたづら}である。御維新前はあばたも大分流行ったそうだが日英同盟の今日から見ると、こんな顔はいささか時候後れの感がある。…吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面もなく20世紀の空気を呼吸しているのだろう。…
…もっとも主人は此功德を施す為に顔一面に疱瘡^{ほうそう}を種え付けたのではない。是でも実は種え疱瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思ったのが、いつの間にか顔へ伝染して居たのである。

太田聴雨によって描かれた「種痘」の持つ緊迫感は、画面中央の一瞬の針先が、生死を託した一瞬だったからなのでしょう。